

インドネシア国家カリキュラム準拠高校教科書 『にほんご☆キラキラ』の開発

ー態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指してー

古内綾子・三本智哉・五十嵐裕佳・八田直美・エフィ ルシアナ

〔キーワード〕 インドネシア、国家カリキュラム、中等教育、教材開発、態度

〔要 旨〕

筆者らは、インドネシアの日本語教育支援の一環として、2013年に発表された国家カリキュラム（以下、K2013）に準拠した高校教科書『にほんご☆キラキラ』（以下、本書）の開発を行ってきた。K2013では、将来、国内外で活躍する人材育成のために、教育文化省が定めた能力（コンピテンシー）の育成を目指しているが、教科・科目で取り上げられる知識や技能とともに、規律や協調性、創造性、責任感といった態度面のコンピテンシーの育成も目標とされている。

本稿では、目的・目標と学習プロセス、学習評価の点からK2013を概観した上で、本書の概要を紹介し、その特徴である、態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指したプロジェクトワークについて述べる。本書は、インドネシア人教師による試用を行っており、試用結果を踏まえた改善を行い、現在、出版の準備を進めている。今後の課題として、教師を対象としたワークショップの実施と、学習評価の方法の検討が挙げられる。

1. インドネシアの中等日本語教育と教科書開発の経緯

国際交流基金が2012年に実施した海外日本語教育機関調査によると、日本国外で日本語を学ぶ学習者の約5割は中等教育段階の学習者だという。その中でも、インドネシアは中等教育での学習者が83万人に上り、世界で最も多い。このほとんどは、高校で教科・科目の1つとして日本語を学んでいる生徒たちである。教師のほとんどはインドネシア人教師で、教科書は国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下、JF ジャカルタ）が制作した『さくら』が多く使用されている。『さくら』^①は、2009年に選択科目用教科書として作成された前カリキュラム準拠の教科書である。

インドネシアでは、約10年ごとに国家カリキュラムが改定される。現在、2013年に発表されたカリキュラム（以下、K2013）が施行され、教育現場では段階的な導入が進んでいる。後述するこのカリキュラムの内容を周知させるため教育文化省主催によるセミナーが各地で開かれているが、発表当初においては理論中心の説明で具体的な教材がなかったため、参加した教師

からは、「新カリキュラムについてよくわからない」「授業にどうやって取り入れられるかわからない」といった声が出ていた(エフィ2016:31)。K2013では、前カリキュラム同様、教育目標としてテーマが示され、新たにテーマに沿った言語行動が示されている。しかし、前カリキュラムには明記されていた文型や語彙などの言語項目の選択は学校や教師に任されている。さらに、K2013では知識や技能だけでなく、態度の育成も求められ、学習者中心の学習方法の導入とそのための教師の役割が変化していることが大きな相違であり、これらを理解することの難しさが現場での実践を困難にしている要因となっていた。JFジャカルタでは、広く現場で使用されている『さくら』を用いたK2013の授業例を作成し、高校教師に向けたワークショップを各地で行った。ワークショップでは具体的な実践例を示したが、個々の教師が毎時間の授業準備のために教材を作りかえることは非現実的であり、「K2013に沿った高校教科書がほしい」という要望が多くあがった。そこで、筆者らは2014年11月よりK2013に準拠した新しい教科書『にほんご☆キラキラ』(以下、「本書」)の開発を開始した。2016年8月現在、3学年分の手稿がほぼ完成しており、出版に向けて準備を進めている。

本稿では、K2013が示す教育目的・目標と学習プロセス、学習評価の点からK2013を概観した上で、本書の概要を紹介し、その特徴である態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指したプロジェクトワークについてまとめる。

2. 2013年カリキュラム

2.1 目的と養われるべき資質・能力

2013年6月、教育文化大臣から発せられた省令第69号⁽²⁾によれば、K2013の目的はパンチャシラの5原則⁽³⁾を踏まえて、生徒たちが「個人かつ国民として信心深く、革新的で生産力・創造力・効率性に優れ、かつ社会・国民・国家・国際社会に貢献できる人間になるよう備えること」である。また、カリキュラムによって「創造性、自律性、協調性、連帯、リーダーシップ、共感力、寛容さ、生活能力」といった資質が開発されなければならないとしている。これらは、近年各国の学校教育で注目されているキー・コンピテンシーや21世紀型スキルとも大きく重なる(国際交流基金日本語国際センター2015, 松本2014)。

K2013では教科・科目で学習される内容に加え、上記のような資質を加えた能力(コンピテンシー)を知識・技能・(精神的・社会的)態度の3つの観点で示している。K2013のコンピテンシーは、各学年に設定された「コア・コンピテンシー (Kompetensi Inti)」とそれに沿った科目ごとの学習目標である「基礎コンピテンシー (Kompetensi Dasar)」がある。例として10年生⁽⁴⁾の日本語科目の「コア・コンピテンシー」および「基礎コンピテンシー」を表1に示す。

表1 日本語科目10年生の「コア・コンピテンシー」「基礎コンピテンシー」

コア・コンピテンシー	基礎コンピテンシー
<p>1. 【精神的態度】 信仰している宗教の教えをよく理解し実践すること。</p> <p>2. 【社会的態度】 正直であり、規律を守り、責任感があり、周囲に配慮を示し（助け合い、協力的、寛容、平和）、礼儀正しく、自発的かつ積極的な心構えを持っており、それを実践し、自分が様々な問題の解決の一端を担っていることを意識して社会や環境において首尾よく対応し、また、国際交流において自分は自国の代表であることを認識していること。</p> <p>3. 【知識】 事実・概念・プロセスに基づいた知識を理解し、実践し、分析する際に、科学、技術、芸術、文化、人文学に対して興味を持ち、関連する人類・国民・国家・文明に対する洞察力を働かせて現象や事象の原因を突き止め、また興味がある特定の得意分野のプロセスに関する知識を用いて問題解決を行うこと。</p> <p>4. 【技能】 学校で学んだ事柄を自主的に発展させ、科学的法則に基づいた手法を使用して、関係する事柄を具体的あるいは抽象的に整理し、論じ、紹介できること。</p>	<p>1.1 <u>日本語をコミュニケーションの手段として学べる機会に感謝し、その気持ちを学習意欲で示すこと。</u></p> <p>2.1 <u>教師や仲間との個人的なコミュニケーションにおいて礼儀正しさと周囲への配慮を示すこと。</u></p> <p>2.2 <u>教師や仲間との事務処理上のコミュニケーションにおいて正直であり、規律を守り、自分に自信を持ち、信頼に値することを示すこと。</u></p> <p>2.3 <u>業務上のコミュニケーションにおいて信頼に値すること、周囲への配慮、協力の精神および平和を求めていることを示すこと。</u></p> <p>2.4 <u>文化や文学作品を評価する際、礼儀正しさと、積極的な態度、独創的な発想、対話型アプローチ、協力の精神、想像力を示すこと。</u></p> <p>3.1 <u>言語的要素と文書構成を文脈に沿って理解しながら、自分自身と学校生活に関する話題に際して自己紹介・出会いや別れの挨拶をし、感謝や謝罪を述べ、ある場合には許可を求めたり指示を与えたりして適切に対応できること。</u></p> <p>3.2 <u>言語的要素と文書構成を文脈に沿って理解しながら、自分自身と学校生活に関する話題に際して自己紹介や挨拶をし、関係する事実、感情、態度について説明・質問し、物品またはサービスを要求・提供できること。</u></p> <p>3.3 <u>自分自身と学校生活に関する話題の際（挨拶、自己紹介）、言語的要素、文書構成、文化的要素の基本的な部分を理解できること。</u></p> <p>3.4 <u>文学作品における言語的・文化的要素の基本的な部分を理解できること。</u></p> <p>4.1 <u>言語的要素と文書構成を文脈に沿って理解しながら、自分自身と学校生活の話題に関する自己紹介、出会いや別れの挨拶、感謝の言葉、謝罪の言葉を表現し、許可の要請や指示を口頭や文書で簡潔に表現できること。</u></p> <p>4.2 <u>言語的要素および文書構成を正確に、また文脈に沿って理解しながら、自分自身と学校生活に関する話題に際して自己紹介や挨拶をし、関係する事実、感情、態度について口頭や文書での簡潔な表現で説明・質問し、物品またはサービスを要求・提供できること。</u></p> <p>4.3 <u>自分自身と学校生活に関する話題の際（挨拶、自己紹介）、言語的要素、文書構成、文化的要素を正確に、また文脈に沿って理解しながら、口頭や文書での簡潔な表現で情報開示ができること。</u></p> <p>4.4 <u>文学作品に関する言語的・文化的要素について口頭や文書で簡潔に表現できること。</u></p>

上述の省令第69号より抜粋。表中の下線および箱による文字の囲いは著者によるものである。箱の囲いは、各学期で取り上げられるべきテーマなど、下線は言語面の学習目標を示す。

例えば、表1の2【社会的態度】の「コア・コンピテンシー」にある態度は、「基礎コンピテンシー」においては「教師や仲間との個人的、事務処理上、業務上のコミュニケーション、もしくは文学作品」と場面が具体化されている。また、3【知識】4【技能】においては、「コア・コンピテンシー」にある知識や技能の対象は、「基礎コンピテンシー」において、「自分自身と学校生活に関する話題での日本語におけるコミュニケーションや文化、文学作品の評価」と範囲が具体化されている。

2.2 学習プロセスと評価

K2013における学習観は、学習者中心の学びということが大きな特徴と言える。省令第81A号⁵⁾には、「知識は教師から生徒へと簡単に移すことはできないという基本的見解」があり、「生徒は、積極的に知識を探し、処理し、組み立て、使用する主体である」とされている。そして、学習プロセスは、生徒の自主性、創造性、自律性を伸ばすことができるように、相互作用的で、啓発的で、やり甲斐があるものにならなければならない。このため「カリキュラムに定められたコンピテンシーを育成するための学習活動も、その認識プロセスにおいて知識を組み立てる機会を生徒に与えるものにする必要がある」。その具体的な方策の1つとして、教育文化省は「科学的アプローチ」を提唱し、普及のためのセミナーを行っている(松本2014:104)。

「科学的アプローチ」とは、「観察、質問、情報収集・実験、関連付け・情報処理、周囲への伝達」を通して行われる仮説検証型の学習活動であり、学習において実証主義的な考え方を取り入れているため、このように呼ばれる。それぞれの学習プロセスを通じて各コンピテンシーが開発されると述べられている(図1参照)。なお、松本(2014)においても言及されているが、この5つの手順それぞれの要素は組み替え可能、入れ替え可能、繰り返し可能である。1回の授業ですべての要素を取り入れる必要もなく、単元単位で考えて良い。

また教育文化省の高校教師向けセミナーでは「科学的アプローチ」のほか、発見学習、プロジェクト型学習、課題解決型学習といった学習モデルも取り上げられている。いずれにせよK2013における学習の主体は生徒であり、プロセスの中において自ら学びを発見する。教師は、ファシリテーターとして生徒を動機づけ学習プロセスを進行する役割を担う。

その学習プロセスの中、あるいはその後に行われる学習評価については、学習の目的が達成され、能力が培われたことを明確に証明し、正確に示す方法が必要だとされている(Membelajarkan Kompetensi Kurikulum 2013)。2.1で見たように、目指されるコンピテンシーは知識、技能、態度であることから、各科目においてもそれらを評価しなければならない。そのために適切な方法を選択することが教師に対して求められている。例えば、態度の評価においては、授業中の観察、自己評価、学習者間評価、教育者による日誌などといった手法、技能の評価では実技試験によってパフォーマンスに対する評価などを行うことが推奨されている。

学習手順	学習活動	開発されるコンピテンシー
観察	読む、聞く、聞き取る、見る	真剣・丁寧な態度、情報収集の訓練
質問	観察で理解できないことを質問する、または追加情報を得るために質問する	創造性、探究心、批判的思考力、質問能力
情報収集 実験	実験を行う、教科書以外の資料を読む、対象・事象・活動の情報源となる人にインタビューする	丁寧・正直・礼儀正しい態度、他の意見の尊重、コミュニケーション能力、情報収集能力、学習習慣、生涯学習
関連付け 情報処理	収集した情報の処理 (より広く深い情報収集、異なる意見・対立する意見など様々な情報から解決策を探し出すなど)	正直・丁寧・まじめな態度、規律、努力、手順適用能力、帰納的思考・演繹的思考により結論を出す能力
周囲への伝達	分析に基づいた観察結果、結論を口頭・文書・他の媒体で伝える	正直・丁寧・寛容な態度、体系的思考、簡明に意見を表現し、適切で正確な言葉を使用する能力

(省令第 81 A 号より要約・作図)

図 1 科学的アプローチの学習プロセス

3. K2013準拠教科書『にほんご☆キラキラ』

3.1 全体概要

本書の目標、基本理念はK2013に従い「高校生が身近な話題を通して、主体的、協働的に日本語を学び、基礎的な日本語能力を身につけるとともに、社会や周囲の人とのつながりや自分の将来を考えること」としている。

本書はトピック・シラバスの教科書で、構成は以下の通りである。

- (1) 生徒用教科書 (10年生から12年生までの3学年分、3分冊)
- (2) 教師用指導書 (同上)
- (3) 授業用スライド (Microsoft PowerPoint ファイル、各課分)
- (4) 音声ファイル (MP3 形式)

(1) と (2) については、市販教材として出版準備を進めている。(3) には (4) も直接挿入されている。そして、(3) については教師が、(4) については教師だけではなく生徒も無料で入手できるようにする予定である。

また、本書の全体構成と時間数は表2の通りである。

表2 全体構成と時間数

学年	課の数	1 課当たり	時間数 ⁽⁶⁾
10年生	12課	3コマ／週×3週＝9コマ	3コマ／週×36週＝108コマ (81時間)
11年生	12課	4コマ／週×3週＝12コマ	4コマ／週×36週＝144コマ (108時間)
12年生	8課	4コマ／週×3週＝12コマ	4コマ／週×24週＝96コマ (72時間)
計	32課		261時間 (実質200時間前後)

開発当初、カリキュラム文書に「基礎コンピテンシー」の記述はあったものの、「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や JF 日本語教育スタンダード (以下、JF スタンダード)、そして、日本語能力試験 (JLPT) などの外部指標と照合できるような到達言語レベルの記述はなかった。そこで、継続して3年間学習を続けたとしても200時間前後の学習時間であること、生徒の希望の有無に関わらず学ぶ可能性もある高校の教科・科目であることを考慮し、筆者らは、本書の到達言語レベルを JF スタンダードの A 1 レベルと定めた。

国際交流基金 (2014 : 70) によると JF スタンダードの A 1 レベルというのは、「話すこと」に関して言うと「相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船を出してくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。」と定義されている。また、来嶋ほか (2014 : 116) によると、A 1 のレベルイメージは、単語もしくは定型表現で、ジェスチャーや視覚的補助を使いながら簡単なやりとりをする、その場の雰囲気を感じながら自分なりにできる範囲でコミュニケーションに参加するというもので、例として名前と国だけの自己紹介や日常のあいさつが挙げられている。これらの記述より、JF スタンダードの A 1 は本書の目指す基礎的な日本語能力と合致していると筆者らは判断した。

また、本書の開発にあたって、単語や表現などの言語項目の多くは『さくら』を参照した。それは、『さくら』が前カリキュラム準拠でインドネシアの高校の状況に合っていること、そして、最もよく使用されている教科書で多くの教師に馴染みがあることが理由である。ただし、課によってはトピックに合わせて新たな言語項目を追加している。

3.2 各課の構成と学習の流れ

各課の学習の流れを視覚化すると図2のようになる。このように、複数の学習項目がグループ化され、四角で囲んだ番号の順に学習活動を行う。そして、各課は以下の A～F の項目から構成されている。

A 「みて かんがえましょう」

各課は写真から色々な情報を読み取ったり、読み取ったことについて母語でディスカッションを行ったりする活動から始まる。ここで、課で扱うトピックの導入と日本語学習上の目標の提示を行う。

B 「きいて いいましょう」「にほんごで いいましょう」「よみましょう」など

このセクションでは、その課で扱う単語や表現の導入と練習を行う。「きいて いいましょう」では場面や文脈をはっきりと提示した上で単語や基本的な表現を導入する。対象語彙のイラストや写真を見せながら、音声と文字によるインプットを十分に与えることで、生徒が自ら語彙の意味に気づくように作られている。

その後、「にほんごで いいましょう」でインドネシア語の説明に合うことばを日本語で言ったり、「よみましょう」で、食堂や教室といった現実社会の文脈における、メニューや教科名といった単語単位の文字（かな）を読んだりすることで導入された単語の練習を行う。

C 「ききましょう」「はなしましょう」

「Refleksi Materi Pembelajaran (学習のふりかえり)」

このセクションは Can-do で設定された技能目標を達成するために、学習活動が構成されている。まず、「ききましょう」で十分なインプットを聞き、生徒がその会話の意味や機能に気づいて理解し、その後の「はなしましょう」でアウトプットとして会話練習を行う。「ききましょう」では、「はなしましょう」の会話例と同じ基本形の会話、そして相槌や繰り返しなどを含むバリエーションがある会話を複数回聞くことを重視している。そして、「はなしましょう」では、基本形の会話を生徒自身の情報におきかえ自己表現することが重要なポイントである。ここでは、簡単な日本語の表現を使って、友だちに自分のことを伝えたり友だちの

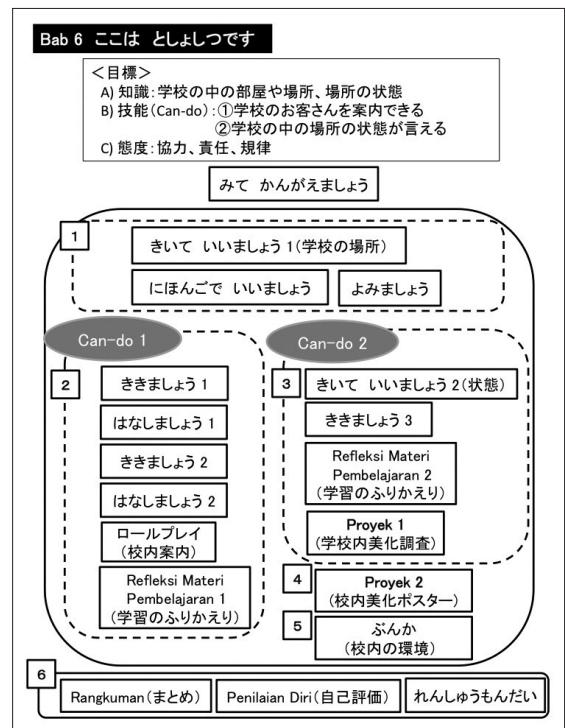


図2 各課の学習の流れ

情報を聞いたりする練習を行う。そして、その2つの学習活動のまとめの活動として、生徒自身で発見した文法の機能や規則を自分の言葉で整理する活動が「Refleksi Materi Pembelajaran (学習のふりかえり)」である。

D 「Proyek (プロジェクト)」 「ロールプレイ」 「Show&Tell」 「Wawancara (インタビュー)」など
これらは、これまで学習してきた内容を元にした総合的、統合的な学習活動である。後ほど3.3で詳しく述べるが、「Proyek (プロジェクト)」は社会や周囲の人とのつながりや態度面のコンピテンシーの養成を意識した活動である。一方、「ロールプレイ」や「Show&Tell」、「Wawancara (インタビュー)」などは、実際に日本語を学ぶ教室を場面とした生徒同士の相互理解やよりよい人間関係づくりを目標とした活動である。

E 「ぶんか」

「ぶんか」は独立したセクションとなっており、課のトピックに関連した写真やデータを読み取り、グループやクラスでのディスカッションを通じて自国の文化を捉え直したり、日本やASEANの国々の文化と比較をしたりする活動である。

F 「Rangkuman (まとめ)」 「Penilaian Diri (自己評価)」 「れんしゅうもんだい」

この最後のセクションは、課のまとめにあたる。「Refleksi Materi Pembelajaran (学習のふりかえり)」が各Can-do目標に関わる表現や文型をまとめる活動だったことに対して、「Rangkuman (まとめ)」は課全体を通じて学んだ表現や文型を生徒自身で整理する部分である。そして、「Penilaian Diri (自己評価)」で課の知識・技能・態度の学習目標がどれぐらい達成できたか、生徒は自分で評価する。また、「れんしゅうもんだい」は課の学習内容の復習として、授業外に行う宿題である。

これらの一連の学習活動には2.2で述べた「科学的アプローチ」が取り入れられている。例えば、「みて かんがえましょう」や「ぶんか」では、写真からわかる情報を読み取ったり、そこから沸き起こる疑問を話し合ったりする活動を行うが、これは、「科学的アプローチ」の「観察」「質問」にあたる。また、「Proyek (プロジェクト)」のインタビュー調査や現状調査などでは、調査として「科学的アプローチ」の「情報収集」が行われ、調査結果のまとめ作業では「関連付け、情報処理」、結果報告のプレゼンテーションでは「周囲への伝達」が実践されている。

3.3 態度面のコンピテンシー育成を目指した活動「プロジェクト」

本書では、K2013に定められている知識、技能、そのなかでも、態度面のコンピテンシーの育成を日本語学習の中で行うための方法として、プロジェクトを取り入れた。

プロジェクトを取り入れた学習では、「教室内での言語学習と教室外の社会をつなぐ」ことができ、「教室内に現実社会の文脈を与えて、教室外の人、もの、情報とつながり、社会的目的を果たすことができる」(国際文化フォーラム2013: 59) という。態度面のコンピテンシーは、生徒の実生活での経験や周囲の社会との関わりなどを通して、育成されるため、教室外の実社会の課題を取り上げて題材とする活動「プロジェクト」を、本書においても学習方法として取り入れた。

以下に、A1レベルの日本語能力を用いてどのようなプロジェクトを設定したのか、本書でデザインした活動の具体例を示す。表3は本書のシラバスからの抜粋である。

表3 シラバス抜粋

例	課	学習する表現	Can-do	態度
A	22	(1) まいあさ 5じに おきます。 (2) まいにち 8じかん ねます。 (3) 8じはんから 3じまで がっこうで べんぎょうします。 (4) げつようびは 5じに おきました。	(1) 生活習慣について簡単に話せる。 (2) 過去の行動が言える。	規律正しい生活、 時間管理
B	6	(1) ここは こうちようしつです。 (2) カンティンは ここです。 (3) ろうかは きれいです。	(1) 学校のお客さんを案内できる。 (2) 学校の中の場所の状態が言える。	協力、責任、 規律
C	15	(1) わたしの ヘやは しずかじゃないです。 (2) にわで でんわを します。 (3) いまは あかるいですから。 (4) きゃくまに エアコンが あります。 (5) わたしの ヘやに ベッドと つくえが あります。 だいどころに れいぞうこや テーブルが あります。	(1) 部屋がどんな場所か特徴が言える。 (2) 家の中のどこで何をするか言える。 (3) 部屋の中に何があるか話せる。	創造力、 協力、 住みやすい 生活環境に ついて考える
D	11	(1) きんようびに プラムカの せいふくを きます。 (2) ベトナムの せいふくは しろです。	(1) 何曜日にどんな服を着るか言える。 (2) ある国の制服の色が言える。	協力、 異文化理解

A 自分の生活習慣を見直す (11年生「第22課 まいあさ5じにおきます」)

第22課は、一日の生活をトピックにした課で、時刻と日常生活の行動を表す日本語を学ぶ。まず、「毎朝6時に起きます」のように習慣を話し、自身の生活習慣を見直し、改善計画として「朝、5時に起きます」と言い、そして、1週間後に、「月曜日と水曜日は5時に起きました」と、その結果を報告する。この一連の課題がこの課のプロジェクトである。

活動において、生徒が日本語で話すことは、単なる日本語の文型練習ではない。自分の日常生活行動を話し、ふり返る行動、目標を発表する行動、改善活動の結果を報告する行動であるため、

日本語使用が現実の生活とつながっていることを意識することができる。このプロジェクトを通して、規律と時間管理の態度面のコンピテンシーを学ぶことを目標としている。

B 学校環境を改善する (10年生「第6課 ここはとしょしつです」)

第6課は、学校案内をトピックにした課で、学校にある部屋の名前や、そこを紹介する表現などを学び、学校で訪問客を案内するロールプレイを行う。その後、自分たちの学校は訪問客を迎えられる状態にあるか、学校の美化環境を見直すプロジェクトを行う。まず、グループごとに学校の環境調査をし、校内の美化状況を報告し合う。そして、その報告結果を見て、環境改善を訴える美化ポスターを作成する。美化ポスターには日本語も使用するが、実際に学校に掲示することが目的のため、全校生徒、教職員も理解できるよう、イラストを工夫し、インドネシア語も使ってポスターを作成する。第6課では、グループごとに行われる調査、報告、ポスター作成という活動を通して、協力的な態度と、自分たちの学校環境に対する責任、よい環境を保つ規律を態度面のコンピテンシーとして学ぶことを目標としている。

C 住みやすい家をデザインする (11年生「第15課 いまでしゅくぐだいをします」)

第15課のトピックは、家で、部屋の名前、部屋の状況を表す表現、家でする動作、家電や家具の名前を学び、自分や他者の家の様子や、家での過ごし方について話したり、聞いたりする。生徒は、様々な家の状況を知った後、グループごとに「お年寄りがいる3世代家族」「子供が多い家族」「その他」の条件の下、それぞれの家族が住みやすい家、部屋をデザインし、発表する。「客間にエアコンがあります」など、物や部屋が存在を表す文は、日本語の初級の教科書でも必ず扱われる文型であるが、プロジェクトでは、よりよい家や住みやすい家についての生徒のアイデアを表すための日本語として使用する。

この課では、創造力やグループ作業での協力的態度、そして、部屋の用途や、部屋にあるといい家具や家電などの物について考えることで、住環境への意識も育てることを目指している。

D 自国および近隣国の文化を発見し、理解する (10年生「第11課 すいようびにパティックをきます」)

第11課は、制服をトピックにし、何曜日にどんな制服を着るのかを日本語で表現する。インドネシアでは、曜日ごとに着る制服が変わるのが一般的であり、曜日と制服の組み合わせは生徒にとって身近な話題である。次に、生徒らは自分たちの制服だけでなく、近隣国のベトナム、タイ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、5カ国の高校生の制服をグループごとに調査し、その結果を発表する。発表で使用する日本語は「ベトナムの制服は白です」であり、インドネシアの制服との違いや、その理由など調査や分析の結果は、インドネシア語で行う。制服

という高校生活では非常に身近な物の比較を通して、インドネシアの独自性に気づき、また、背後にあるそれぞれの国の特徴や制服がもつ意味や機能を深く考察することが目的である。グループでの制服調査を通して、協力的態度を育成し、文化比較や分析を通して異文化理解能力の育成も目標としている。

4. 試用後の改善点

筆者らは、10年生の試用版教科書を作成し、2015年3月から10名の教師に試用を依頼した。その授業を見学するとともに試用した教師からもフィードバックを得た。また、開発中のいくつかの課を使用する研修を行った。研修内やその後の授業で使ってもらい、直接的・間接的フィードバックを得た。これらのフィードバックをもとに改善を加えた。

まず、「ぶんか」で、方向性をもった設問を複数置くように変更した。試用版では、写真やデータを観察し、気づいたことや、いくつかのポイントについて話し合いなさいといった指示文しか書かれていなかった。そのため、話し合ったこと同士がどう繋がるか、セクション全体としてどうまとめればいいのかが教師にとって分かりにくかった。例えば図4では、「表を見て感じたことや考えたことを友達と話し合ってみましょう。」といった指示のみで、考えてほしいポイントが明示されていなかった。そこで、生徒自らが考え、思考をより深められるような一連の設問を明示する形にした。図5の例では、具体的に、データの数字を比率として認識した後に、それぞれの国が東西に広い、あるいは南北に広いということに目が向くような問いかけをした。そして、そのことが自分自身の生活にどう関わるのかについてまとめ、セクション全体をふり返る流れに改善されている。また、試用中の授業では教師用指導書に書いてある文化知識を教師が一方的に説明してしまう場面もあったため、生徒が考えたり話し合ったりした内容を自分の言葉で記述するスペースを設けるように改善した。

また、「Proyek (プロジェクト)」も、「ぶんか」と同様に、教科書の記述方法を改善した。試用中の授業を見学すると、調査や結果のまとめ方、発表の仕方、グラフのつくり方など日本語の授業にこれまで出てこなかったような教室活動が含まれている場合、教師自身が意図の理解や目的に沿った実践が難しい様子だった。そこで、プロジェクトの手順をより細分化し、できるだけ分かりやすく記述するように修正した。また教師用指導書にはプロジェクトを行う上での注意点や意図を盛り込むように改善した。

そのほか、1課にかかる所要時間を増やした。当初はおよそ270分（6コマ）と想定していたが、試用版の授業見学において、時間をかけて行いたい活動で時間が足りない様子が見受けられた。教師からも同様のコメントがあったことから、1課にかかる所要時間を405分（9コマ）に増やした。それに伴い教科書に収める課の数を16課から12課に減らした。

5 ぶんか

下の表はインドネシアと日本の人口や地理とを比較したものです。表を見て感じたことや考えたことを友達と話し合ってみましょう。

	インドネシア	日本
人口	247,000,000 (2012)	126,910,000 (2014)
面積	1,919,440 km ²	377,873 km ²
人口密度	124 oran / km ²	337.6 oran / km ²
島の数	13,466 (2013)	6,852 (2009)
排他的経済水域(順位)	5,410,000km ² (3)	4,470,000km ² (6)
東西の長さ	約 5,110km	約 3,143Km
南北の長さ	約 1,888km	約 3,020Km
陸地に占める森林率	52%	69%
首都の月別平均気温 (最高と最低)	29.6℃(Okt) 27.3℃(Jan)	27.0℃ (Aug) 6.1℃(Jan)

* 世界の統計 2015 <http://www.stat.go.jp/data/sekai/index.htm>

図4 改善前の「ぶんか」セクション例 (原文はインドネシア語)

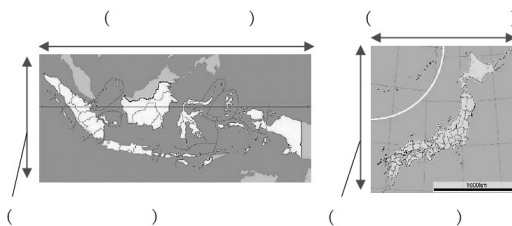
5 ぶんか

下の表はインドネシアと日本の人口や地理とを比較したものです。

1. 2つの国の人口や面積について比率を数字で表してみましょう。

	インドネシア	日本
人口 (調査年)	247,000,000 (2012)	126,910,000 (2014)
島の数 (調査年)	13,466 (2013)	6,852 (2009)
面積(順位)	1,919,440 km ² (15)	377,873 km ² (61)
排他的経済水域(順位)	5,410,000km ² (3)	4,470,000km ² (6)
東西の長さ	+/- 5,110km	+/- 3,143Km
南北の長さ	+/- 1,888km	+/- 3,020Km

* Statistik Dunia 2015 <http://www.stat.go.jp/data/sekai/index.htm>



2. 表の数字を下の地図に書いて、国の形や水域について考えたことを話しましょう。
3. 国土が東西あるいは南北に長いということは、みなさんの生活とどんな関わりがあると思いますか？
4. インドネシアと日本の地理についてどんなことを考えましたか。書いてみましょう。

図5 改善後の「ぶんか」セクション例 (原文はインドネシア語)

5. 今後の課題

4章で述べた試用に協力した教師の授業や教師対象のワークショップにおける模擬授業では、学習者中心とは言えず教師主導で活動を進めてしまう場面がしばしば見られた。それは、教師自身が自律的・協働的な学びの経験が少なく、学習者中心の授業のイメージができていないことからではないかと考えられる。そこで、教師対象にK2013が求める自律的・協働的な学びにつながるような構成のワークショップを今後も実施していく予定である。ワークショップにおいて、教師は本書の学習者体験をするだけでなく、自身の教え方のふりかえりや、他の教師と協力して行う授業実践を通じて、自律的・協働的な学びを実際に体験する。それは、教師自身のコンピテンシーの実感が、K2013の理解と実践につながると考えるからである。

また、2.2で述べたようにK2013では知識、技能、態度の3つの観点からの評価が求められており、K2013準拠の本書の各課の目標もその3つの観点で記述されている。それに合わせて、現時点では各課に「Penilaian Diri」という3つの目標を達成したかどうかの自己評価がある。また、プロジェクトによっては成果物の相互評価、そして、課末には筆記試験や技能試験を作成する際の参考にできる「れんしゅうもんだい」があるが、実際に教育現場で活用するためには、評価基準や実施方法といった情報が必要である。今後、K2013に即した評価とは具体的にはどういったものなのか現場の教師とも一緒に検討していきたい。

〔注〕

⁽¹⁾ 『さくら』は、前カリキュラムに従って、達成すべき基本的能力が四技能別に記述され、各課は「授業の導入→語彙→基本練習→応用練習」で構成された文法シラバスの選択科目用の教科書である。文字学習の負担を軽減させるためローマ字表記を導入し、写真付きの日本文化紹介が添付されているなどの特徴がある。前カリキュラムやその準拠教材作成については、古川・藤長（2007）、栗原（2009）に詳しい。

⁽²⁾ Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan, Republik Indonesia, Nomor 69 Tahun 2013 : Tentang Kerangka Dasar dan Struktur Kurikulum Sekolah Menengah Atas/Madrasah Aliyah Lampiran（インドネシア共和国教育文化大臣省令2013年第69号：一般高校・宗教高校のカリキュラムの基本的枠組と構成）（2013年6月27日制定）

⁽³⁾ パンチャシラとは、以下の建国5原則である。①唯一神への信仰、②公正で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④合議制と代議制における英知に導かれた民主主義、⑤全インドネシア国民に対する社会的公正。

⁽⁴⁾ 学年の名称は、小学校から引き続き、高校1年生が10年生、以下、11年生、12年生となる。

⁽⁵⁾ Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia, Nomor 81A Tahun 2013 : Tentang Implementasi Kurikulum, 2013（インドネシア共和国教育文化大臣省令2013年第81A号：カリキュラムの実施）（2013年6月11日制定）

⁽⁶⁾ 省令第69号によると、10年生と11年生は36週から40週、12年生は32週から36週授業を行う。

〔参考文献〕

- エフィ ルシアナ (2016) 「インドネシアの中等教育における日本語教育の発展をふり返って－非母語話者教師と母語話者教師の役割－」『ことばと文字』 5号、26-35、公益財団法人日本のローマ字社
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2014) 「『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、115-129、国際交流基金
- 栗原明美 (2009) 「高校の選択科目としての日本語教育－『さくら』作成を通じて感じたこと－」世界の日本語教育の現場から (国際交流基金日本語専門家レポート)
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/indonesia/2009/report13.html>
(2016年8月21日参照)
- 国際交流基金 (2014) 『JF 日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック [第3版]』
- 国際交流基金日本語国際センター (2015) 『21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育－各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト－』
<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/research/five_southeast_asia/index.html> (2016年8月21日参照)
- 国際文化フォーラム (2013) 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』公益財団法人国際文化フォーラム
- 古川嘉子・藤長かおる (2007) 「インドネシアの中等教育向け日本語教材作成プロジェクト」『国際交流基金日本語教育紀要』第3号、45-62、国際交流基金
- 松本剛次 (2014) 「インドネシアの中等教育改革をめざす「能力 (コンピテンシー)」とその育成」『日本語教育』158号、97-111、日本語教育学会
- Membelajarkan Kompetensi Kurikulum 2013 : Mata Pelajaran Bahasa Jepang Melalui pendekatan Saintifik (2013年コンピテンシー学習カリキュラム : 科学的アプローチで学ぶ日本語学習)
- Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan, Republik Indonesia, Nomor 69 Tahun 2013 : Tentang Kerangka Dasar dan Struktur Kurikulum Sekolah Menengah Atas/Madrasah Aliyah Lampiran (インドネシア共和国教育文化大臣省令2013年第69号 : 一般高校・宗教高校のカリキュラムの基本的枠組と構成) (2013年6月27日制定)
- Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia, Nomor 81A Tahun 2013 : Tentang Implementasi Kurikulum, 2013 (インドネシア共和国教育文化大臣省令2013年第81A号 : カリキュラムの実施) (2013年6月11日制定)